

# オオメシバンムシ (和名新称) の分布記録

亀澤 洋<sup>1)</sup>・酒井雅博<sup>2)</sup>・野村周平<sup>3)</sup>

<sup>1)</sup> 〒 350-0825 埼玉県川越市月吉町 32-17 (kamezawahimou@gmail.com)

<sup>2)</sup> 〒 791-0203 愛媛県東温市横河原 519-23 (msakai4864@yahoo.co.jp)

<sup>3)</sup> 国立科学博物館動物研究部 (nomura@kahaku.go.jp)

## Faunistic Records of *Hyperisus pacificus* Sakai, 2001 (Coleoptera, Ptinidae)

Hiromu Kamezawa, Masahiro Sakai and Shūhei Nomura

オオメシバンムシ *Hyperisus pacificus* Sakai, 2001 は伊豆大島産の個体をもとに記載されたヒョウホンムシ科 Ernobiinae 亜科に所属する甲虫である。種小名にあるように、太平洋岸で確認されているシバンムシである。

### 既知の産地

原記載では、ほかに伊豆諸島の八丈島と神津島、東京湾の猿島 (横須賀市)、伊豆半島から得られたものがパラタイプに指定されている。

四国は高知県および愛媛県からも得られているが、四国産にはわずかに形態差が認められていることからタイプシリーズには含まれていない (Sakai, 2001)。

原記載以降の記録としては、筆者らの知る限りでは、生川・中山 (2006) および生川 (2008) による三重県からの記録、平野 (2007) および渡ら (2016) による三浦半島からの記録のほか、川畑 (2009) が八丈島の甲虫をまとめた際に採集データと標本写真を示しているにすぎない。

### 新たな分布記録

筆者の一人亀澤は、本種を伊豆諸島の御蔵島、房総半島南部の数地点で確認しているため報告するとともに、これまで和名がなかったため、今回、表題のように提唱する。

2♂♂, 東京都御蔵島村里, 12-16. V. 2013; 1♂, 千葉県南房総市白浜町乙浜, 4. V. 2010; 3♂♂, 同地, 10. V. 2015; 3♂♂ 1♀, 同地, 6. V. 2017; 7♂♂ 1♀, 同地, 6. V. 2018; 2♂♂, 千葉県南房総市山下, 3. V. 2018; 1♂ 1♀, 千葉県南房総市白浜町滝口, 4. V. 2018; 2♂♂ 3♀♀, 千葉県南房総市千倉町蓮台枝, 5. V. 2018; すべて筆者採集, 保管。

### 御蔵島および千葉県初記録。

御蔵島では、スダジイが優占する樹林内に設置した吊り下げ式の FIT (フライト・インターセプション・トラップ) 2基によりそれぞれ 1 個体ずつが捕獲された。1基はスダジイ大木の倒木によってできた谷部のギャップに、1基は尾根筋の風通しの

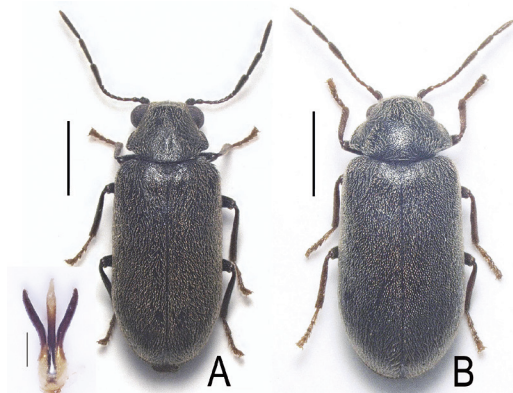


図 1. オオメシバンムシ。A, ♂ (房総半島産, 左に示した雄交尾器 (腹面) のスケールは 0.2 mm); B, ♀ (同, スケールは雌雄とも 1 mm)。



図 2. オオメシバンムシ確認環境。A, スダジイ倒木によるギャップ (御蔵島); B, FIT 設置状況 (御蔵島); C, 林縁環境 (南房総市白浜町); D, 尾根筋のマテバシイ林 (南房総市千倉町)。

良い林内に設置していた。トラップは、横 25.7 cm 縦 54.6 cm の透明プラスチック薄板の衝突板に雨除けの屋根をつけ、保存液（短期間だったため 60 パーセントのエタノール水溶液を使い、5 日間のうちに適宜補充した）を入れたプラコップで受ける仕様で、地上 0.5~1.5 m の高さに衝突板が位置するように木の枝に吊るしていた。御蔵島での調査は、許可を得て行った。

房総半島では、マテバシイが優占する樹林内や、杣道沿いの林縁で灌木の枝葉のピーティングにより得られ、林内のスダジイのひこばえや林縁のアオキ、ヤツデ、カクレミノの葉上や葉裏に静止しているのが観察された。成虫は盛んに飛び回り、立木のひこばえや灌木の枝葉上に定位しているようである。千葉県千倉町の産地は現時点で分布東限に当たる。

Sakai (2001) は、愛媛県下においてウバメガシ枯れ枝から羽化脱出した個体を検視標本に含めている。ただし、今回、筆者らの確認地にはウバメガシは存在していなかったため、幅広い樹種の枯れ枝に依存している可能性がある。

また、野村ら (2000) は東京都千代田区の皇居から *Hyperisus* sp. を記録している。今回、記録の元となった標本を検したところ、本種であることが判明したので合わせて記録する。

1 ♀, 吹上御苑, 12. IX. -7. X. 1996, 小西和彦採集, 国立科学博物館所蔵。

マレーズ・トラップによって捕獲された。東京都の本土部からは初記録となり、現時点での分布北限に当たる。

### *Hyperisus* 属の特徴

本種を含む *Hyperisus* 属の特徴について、和文で書かれたものがないのでここにまとめておく。

*Hyperisus* 属はもともと *Xestobium* 属の亜属とし



図3. オオメシバムシの確認地点。★: タイブロカリティ, ●: 既記録, ●: 新記録 (地理院タイトルの白地図を加工して作成)。

て扱われていたが Sakai (2001) により属に昇格された。日本産に限れば *Xestobium* 属とともに 2 属で *Xestobiini* 族を構成する。 *Xestobium* 属とは以下の点で異なる。

*Hyperisus* 属では、1) 第二次性徴 (触角の構造や複眼の大きさに表れる) が顕著、2) 後胸腹板中央の縦溝は不明瞭、3) 関節先端の棘が発達せず、4) 触角の先端 3 節が *Ernobius* 属 (族は異なる) のように長く伸長してゆるい球桿を形成し、5) 咽頭縫合線上の幕状骨の穴は深く丸く、6) 前胸側縁は *Xestobium* 属では後角を除いてほとんど完全に平圧され、先端まで達するのに対し、 *Hyperisus* 属では先端 2/3 が平圧されるが、先端部には達しない、7) 雄交尾器の中央片、側片は単純に左右対称で、枝分かれや付属物はない。

なお、 *Xestobium* 属の日本からの既知種は北海道、本州の亜高山帯で見つかったホソマダラシバムシ *X. shibatai* Sakai, 1979 のみで、 *Hyperisus* 属も日本では本種しか知られていない。

### 謝辞

本研究の一部は、東京農業大学の小島弘昭博士を代表研究者とする科研費基盤研究 (C) の「伊豆諸島の甲虫類の種および遺伝的多様性の解明とホットスポット推定」(課題番号: 24510333) の助成を受けている。同博士に厚くお礼を申し上げる。文献入手に際してお世話になった平野幸彦 (小田原市)、松原豊 (横浜市)、生川展行 (鈴鹿市)、菅谷和希 ((株) 環境指標生物) の 4 氏、また御蔵島での現地調査に際し便宜をはかってくださった、みくらしま観光協会の菱井徹、小木万布、広瀬節良の 3 氏にも謝意を表す。

### 引用文献

- 平野幸彦, 2007. 三浦半島新記録などの甲虫類. かまくらちょう, (68): 23.
- 川畑喜照, 2009. 伊豆諸島八丈島の甲虫 V. 神奈川虫報, (168): 21-30.
- 生川展行, 2008. 鈴鹿市の海岸で採集した甲虫. ひらくら, 52 (4): 56-60.
- 生川展行, 中山 惇, 2006. 志摩市で採集した注目すべき甲虫. ひらくら, 50 (6): 93-95.
- 野村周平・平野幸彦・斎藤明子, 上野俊一, 渡辺泰明, 2000. 皇居の甲虫相. 国立科博専報, (36): 185-255.
- Sakai, M. 2001. *Hyperisus* as a distinct genus, with description of a new species from Japan (Coleoptera, Anobiidae). Japanese journal of systematic entomology, 7 (2): 327-332.
- 渡 弘, 露木繁雄, 坂本繁夫, 鈴木 裕, 2016. コウチュウ目 Coleoptera. 三浦半島米海軍施設昆虫調査団編, 三浦半島の米海軍施設昆虫調査報告書. かまくらちょう, (89): 68-131.

(2019年1月9日受領, 2019年1月31日受理)